



書 評



健康食品・サプリメントと医薬品の相互作用 早引き事典

日本健康食品・サプリメント情報センター、
安西恵子 編

(小B6判/96頁/1,200円(税別)/同文書院/☎03-3812-7777)

薬局は医療提供施設として医療・介護への関わりとともに、地域住民の健康づくりにおいて、セルフメディケーションの支援など、身近で専門的な支援が受けられる場所としての役割が期待されています。

その中で食品の新たな機能性表示制度が2015年4月から始まり、機能性表示食品では「医薬品を服用している者は医師、薬剤師に相談した上で摂取すべき」旨の記載が義務づけられました。

特定保健用食品や機能性表示食品、いわゆる健康食品(サプリメント等)の使用について、薬剤師・薬局が適切な使用の啓発や相談応需に努めることがかかりつけ薬剤師・薬局としての役割と考えます。

この書籍は、医師や薬剤師がその場で患者さんに自信を持って、即座にアドバイスができる携帯用の早引き事典として、手帳ほどの大きさにまとめられています。

日本医師会・日本薬剤師会・日本歯科医師会総監修の「ナチュラルメディシン」の抜粋版として編集されており、科学的根拠を基にした医薬品と健康食品・サプリメント(以下、サプリメント等)の相互作用が分かるだけでなく、医薬品名からサプリメント等を、サプリメント等から医薬品名を簡単に検索できます。また、相互作用の危険度レベルについても、重症度(どのような症状が現れるか)と頻度(発生の可能性)の組み合わせで記載されています。

薬剤師・薬局にとって現場で瞬時に活用できる情報書籍として欠かせないものと言えます。

(つちばし薬局代表取締役 藤原英憲)

総合診療医が教える よくある気になるその症状

レッドフラッグサインを見逃すな!

岸田直樹 著

(A5判/286頁/2,600円(税別)/じほう/☎03-3233-6333)

「よくある気になるその症状」という書名と著者が総合診療医という、最近地域医療を語る際によく話題に上る診療科ということが気になってページを開いてみた。読み進むうちに、本の構成がとても新鮮に感じられた。わが国の高齢化のピークとなる2025年に向けて、世界に冠たる社会保障制度と地域医療提供体制を維持するための方策として、国は「地域包括ケアシステム」という概念を示した。そのなかで、薬剤師・薬局には医薬品の提供体制における大きな期待が社会から寄せられていて、その役割を十分に果たせるよう日本薬剤師会・都道府県薬剤師会ではさまざまな施策や事業を展開している。そうした事業のなかに、医薬分業の進展とともに比較的粗略に扱われがちであったOTC薬を活用して、セルフメディケーションを進める観点から、住民の訴える症状に的確に対応するため「薬剤師の臨床判断」に関する研修会が開催されている。

本書は一見するとその研修会で学ぶ対処法に似ているが、個別の疾患に対応した臨床判断研修とは少し趣を変えて、本書では現場で患者や地域住民と接する薬剤師ならば、必ず出くわす代表的な症状を例示し、その症状を平易に解説しながら、階段を一步步上るようにその問題の解決に導く手法である。「疾患別臨床判断」が細分化された、個々の事例への対応を目的としているとすれば、本書の手法は代表的な事例をあげて対処や解決の方法を示し、それらを相談された相手によって自在に変化させる応用力を養うに打ってつけの書籍であろう。かなり長い間、調剤に偏重した業務が進んできた指摘される開局薬局にあって、かかりつけ薬剤師・薬局を目指して医薬品の一元的な供給と管理を確かなものとするうえで、OTC薬を活用したセルフメディケーションへの積極的な関わりは、地域包括ケアシステムにおける薬剤師・薬局の基本的な業務と考えられている。地域住民の医薬品に関するよろず相談場所として、また、適切な判断の下でOTC薬の効果的な使用の確保ならびにそれらを使う患者や地域住民の安全な医薬品使用を確保するうえで、いつも薬剤師の傍らに置いておきたい書籍の一つである。

(日本薬剤師会会長 山本信夫)